

はくさい

白菜と言えは冬を代表する野菜ですが、日本には明治時代に

めいじだい

入って来ました。白菜は中国が原産地で、明治8(1875)年

ちゅうごく げんさんち

はくらんかい

てんじ

さんとうはくさい

あいちけんしよくぶつえん

に東京の博覧会で展示された山東白菜を愛知県植物園がゆず

さいばい

り受けて栽培したのが日本での栽培の始まりです。ところが、栽

けつきゅう

培した白菜は葉が開いたままで、ほとんど結球せず、しんまで

ひ

みどりいろ

日にあたつてしまい、色も緑色でした。

あいちぐんだいとうろうむら

げんざい

そこで、明治18(1885)年に、愛知郡大蠋螂村(現在の

なかがわくだいとうろう

のぎきとくしろう

中川区大当郎)の野崎徳四郎(1850年～1933年)が植

たね

ひんしゅかいりよう

物園から種をもらい受け、品種改良を続けました。10年間、

こんき

根気よく取り組みを重ねた結果、明治28(1895)年、45

たんじよう

歳の時にとうとう日本で初めての結球白菜を誕生させること

でき

のぎきはくさいにいう

おんだん

が出来ました。この白菜を「野崎白菜二号」と言います。温暖な

てき

やわ

とくちやう

地方での栽培に適し、軟らかく甘みがあるのが特徴です。その

しゅうへんちようそん

かくだい

せいさん

後、周辺町村に栽培を拡大し、生産も増えていきました。

たいしやう

あいちけんのうじしけんじよう

大正6(1917)年には、愛知県農事試験場が結球白菜を

あいちはくさい

「愛知白菜」と名づけました。現在、「野崎白菜二号」は「愛知の

でんとうやさい

のぎきせいしゅじやう

伝統野菜」に選ばれており、区内の野崎採種場が種作りに取り

組んでいます。

【参考資料】『すくんでいてもはじまらない』(KTC中央出版)、『愛知に輝く人々4』(愛知県教育振興会)、『ハクサイの絵本』(農山漁村文化協会)